

I. 魯迅について

魯迅（1881－1936）、中国近代文学の基礎を築く

【前期】（1903－1926）

初期文学活動の時期（1903－1909）、日本留学の時期にあたる

1911年 辛亥革命（1912年、中華民国の建国）

『呐喊』の時期（1918－1923）、「阿Q正伝」「故郷」『労働者シェヴィリョフ』

（アルツィバーシェフ著）

『彷徨』の時期（1924－1926）、「祝福」「孤独者」、散文詩集『野草』『小さな

ヨハネス』（ヴァン・エーデン著）

三・一八惨案（1926）

【後期】（1927－1936）、国民革命の挫折（1927）

雑文・翻訳の時期（1927－1936）、『故事新編』の一部の小説、『芸術論』（プレ

ハーノフ著）

革命文学論争（1928－1929）

II. 小説「離婚」について

一 「離婚」（1925・11・6、『語絲』第54期、『彷徨』）の女性主人公愛姑

愛姑という農村女性の性格・思想、および反抗・闘争を、どのようなものとするか。

二 梗概

場面は二つに分かれる。

主人公愛姑は清末のある日、父親の莊木三（近隣の農民に一目置かれる富裕な自作農と思われる）とともに乗合船で慰老爺〔慰旦那、地主〕の新年の祝いの会にでかける。そこには七大人も招かれている。船中の農民同士の会話によって、この間の事情が語られる。愛姑はこの三年間、夫の家（施家）と紛争を起こしていた。夫はある寡婦と親密になり、施家は愛姑に離婚を要求する。莊家はこれに抗議し、施家のかまどの打ち壊しをした。愛姑は意地で離婚を拒否しつづけ、慰老爺の調停にも反抗する。その日、調停が七大人を交えて、慰老爺の屋敷で行われることになっていた。

愛姑は七大人（地主）には読書人の見識があり、公平な裁きがなされるはずであると信じていた。屋敷の広間で、慰老爺から七大人の意向が先ず伝えられる。別れるのがよい、手切れ金は10元積みまして90元とする。父親莊木三は何も言わず、愛姑は勇を鼓して自分の婚姻の正当性を主張し、裁判も辞さないと言う。七大人はこの措置が決して愛姑にとって不利ではないと言い聞かせる。愛姑は孤立無援の中で、七大人に失望しつつ、なお抵抗しようとする。しかし七大人の「来～～兮〔これ～～へ〕」の声に、愛姑は突然おびえ、状況が急激に悪化したと思ひこむ。愛姑は自分が誤っていたと感じ、七大人の斡旋に従うことを述べる。こうして離婚が成立する。

三 「離婚」の先行研究と課題

1 「離婚」の先行研究

(1) 「辛亥的女児——1925年的『離婚』」(須旅〔何幹之〕、『魯迅研究叢刊』第1輯、魯迅文化出版社、1941・1)

「辛亥的女児」は次のように指摘する。辛亥革命は挫折し、封建的經濟基礎を突き動かすことがなかった。そのため中国の女性は辛亥革命から何ものも得ることがなかった。この「辛亥の娘」とは、自然発生的に封建社会に反抗するけれども、孤立し敗北せざるをえない女性、辛亥革命前後の旧社会がその敗北を傍観したにすぎない女性を指す、と思われる。同論文は、魯迅が都市ではなく、中国の女性の大部分が暮らす旧社会の農村の女性を取りあげたところに意味があるとする。また魯迅は、農村女性の婚姻関係を地主の搾取関係(「封建的超經濟的搾取」と結びつけてあつかい、その本質を明らかにしているとする。愛姑には二重性がある。一つは、その野性的な性格で、魯迅は愛姑の農民的な粗野な勇気を称揚する。愛姑の「意地」は(自然発生的な)ものであるようだが、また自分の家庭生活が破壊されるのを甘受しないためであるが、しかし「これはまさしく愛姑の人格の覚醒する萌芽である。」(454頁)もう一つの側面は、愛姑の無力である。愛姑には闘争の精神があるが、しかしその闘争は自覚的な闘争ではない。それが愛姑の無力である。魯迅は、愛姑のような人物に対して心から愛した。しかし愛姑を粉飾しなかった、当時の現実を粉飾しなかったとする。「愛姑はかつて自然発生的に自分の(人格)のために封建勢力と闘争した。しかし敗北した。」(456頁)「愛姑は闘争の中で貴重な野性を現した。」(456頁)

(2) 「説『離婚』」(呉組細、『中国現代文学研究叢刊』1985年第1期、1985・1)

「説『離婚』」は、この物語の意味を、愛姑個人の結婚の問題、それをめぐって彼女が抑圧を受けた問題であるとは考えない。「辛亥の娘」愛姑の反抗を民主主義革命の観点からとらえ、その積極的意義を社会的思想的な観点から評価して、女性が人権、民主的権利を争う問題としてとらえる。同論文は、愛姑の「二本の鎌」あるいは「鎌式」の足を、「どうやら、纏足の足でもなく、自然な足でもなく、纏足を解いてなお完全には解かれていない、大きくもなく小さくもない足である」(97頁)とする。纏足をし、その後纏足を解こうとする意志をもった女性であると解釈する。愛姑の生活する農村が東南沿海地区にあり、商品經濟がもともと発達して、文化と思想において他地域とは異なった様相があったとする。また一人一人の登場する農民について詳細に分析する。

「愛姑の時代はまさしく辛亥革命の後であり、この革命を中国資産階級が指導した。しかし反帝反封建の任務は達成されなかった。(中略)そのためこの革命はひとりの皇帝を追い払っただけで、これに替わってできたのは、むしろ依然として地主階級の軍閥官僚政治であった。中国は依然、帝国主義と封建主義の圧迫と搾取のもとにあった。

愛姑という初めて人権思想をもった農村女性の性格は、まさしく上述の時代の社会と階級的特徴の反映である。彼女の闘争の軟弱さと目標のなさ、彼女が封建的支配勢

力を信じ、そして七大人の威勢に甘んじて屈服するのは、上述の分析から説明することができる。」(99頁)

魯迅はこの「辛亥の娘」の態度における、闘争する勇氣と容赦のない暴露を称賛するとする。しかしその重点は、愛姑の闘争の弱点を諷刺するという一面にある。それは旧民主主義革命に対する失望と否定の気持ちの流露でもあるとする。

愛姑は、この社会的環境と境遇において、完全に孤立無援である。愛姑の反抗意識が圧迫されて成長できなかったのは、当然であり、愛姑の屈服は歴史的悲劇である。それはちょうど旧民主主義革命の失敗が特定の歴史的条件に基づくことと同様であるとする。この小説には、①愛姑と嫁ぎ先の夫舅との矛盾、②莊木三と施家の矛盾、③莊氏の父娘の矛盾、が描かれる。しかし小説の主要な矛盾は、二つの思想を体現する双方の、すなわち民主主義思想(人権思想、女性の権利思想等)の萌芽を体現する愛姑と、七大人をはじめとする地主集団の封建主義思想との矛盾であるとする。

「封建主義に反対する歴史的責は新しい階級の指導する新しい革命によって完成されなければならない。これこそ魯迅がこの離婚事件の中で提起した、当時の中国の革命の方向と路線の問題である。」(111頁)

(3) 「重読魯迅『離婚』」(秦林芳、『中国現代文学研究叢刊』1994年第4期、作家出版社、1994・10)

愛姑は「旧中国の子女たち〔老中国的儿女〕」の一人であり、その個性には近代民主主義の精神はなく、近代的個性主義は見られない。愛姑は古来の伝統的な「澆婦」〔きかん気の女。じゃじゃ馬〕にすぎない。しかし愛姑の反抗は伝統的規範を無視した行動であり、それなりの歴史的合理性があったとする。それゆえ愛姑の悲劇は基本的に性格悲劇である。そしてその反抗の目標は封建的色彩を帯び(「家敗人亡」)、封建的手段によって(七大人の公平な裁き)反封建の闘争を行おうとするものである。それゆえ魯迅は愛姑の闘争について二重の評価をする。

①封建勢力に対する自然発生的な野性に充ちた愛姑の闘争に対して、魯迅はいささかの留保もなく愛姑に同情する。「重読魯迅『離婚』」は許欽文の回憶を引用する。

「確か私が『離婚』の原稿に目をとおしているときに、魯迅先生は私がすでに《語絲》でこの小説を読んだことがあることを知って、ただ簡単に二三言いった。『この愛姑も、本来反抗性がある、いくらか闘うことができた。しかし『傷逝』の子君のように、まだ成長していず、暗黒社会の悪い勢力に抑えつけられてしまいました。』」(「祝福書」、許欽文、『《魯迅日記》中的我』、浙江人民出版社、1979・8)

そのうえで、「重読魯迅『離婚』」は次のように指摘する。

「『呐喊』『彷徨』の一連の形象の中で、下層の勤労女性が立ちあがり反抗するものは愛姑一人しかない。魯迅はそれに対して深い同情を与えざるをえないものである。」(203頁)

②しかし同時に魯迅は、その反抗の封建的目標と封建的手段に対して批判をもっているとする。また、施家との対立の中で表われる、粗野で、横暴、浅はかで、悪辣な愛姑

の一面は、魯迅が伝統的国民性の悪の現れとして極力批判したものである。このことが愛姑に対する魯迅の同情を限界づけているとする。

それゆえに同論文は次のように結論を述べる。

「これは魯迅の二重の悲哀を伝える。(一) 封建勢力があまりにも強大であるとき、愛姑の闘争の失敗は不可避である。(二) たとえ愛姑の闘争が勝利を得るとしても、それは近代民主主義的意識の勝利とは無縁であり、同じく不幸なものたちに対して傷害を与え、自分の不幸の延長をもたらすことができるだけである。このために、強大な封建勢力と戦って勝利を得、近代民主主義の勝利を実現しようとするならば、〈思想革命〉、〈国民性の改革〉を引き続き行わなければならない。これが『離婚』の示す客観的な思想的意義と作者の主観的傾向であるのだろう。」(204頁)

2 先行研究に基づいて設定する課題

(1) 魯迅の民衆観の変化・発展過程において、また当時の彼の社会観に基いて考えるとき、愛姑の性格・思想はどのように評価できるであろうか。魯迅は、愛姑をたんに「淫婦」(伝統的国民性の悪を発揮するきかん気の女)にすぎないとしたのか。それとも「淫婦」であるとしても、そこに人としての自覚の萌芽を見たのだろうか。また、1925年当時の魯迅の伝統的国民性の悪とは何を指していたのか(「淫婦」のような性格に対する批判だったのか)。

(2) 愛姑の反抗・闘争と敗北を、魯迅の当時の社会観、当時の社会的状況に基づいてどのようなものとして位置づけることができるのか。魯迅は新しい階級の指導を、1925年当時において予測することができたのだろうか。

四 1925年頃の民衆観

1 伝統的国民性の悪批判

魯迅は1925年当時、中国変革の道はなお依然として、『新青年』で主張された「思想改革」(国民の精神的改革)を行うことに主要な課題があるとする。(その対象については当面、知識人であると考え、民衆は別的手段を考えなければならないとした。)辛亥革命の挫折した頃から、『呐喊』の時期をへて1924年頃まで、魯迅の民衆観は「『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長」(「『魯迅景宋通信集』二四」、1925・5・30、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6)の過程を構成する一環として、それぞれ深化をとめないながら、存在した。

中国変革にとって、国民の精神的改革(思想改革、伝統的国民性の悪の改革)こそ根本的な課題である。1925年頃、魯迅のとらえた伝統的国民性の悪とは何であったのだろうか。

「先生のお手紙は言っております。惰性が現れる形式は一つではない。最も普通なのは、第一は命を天に任せること、第二は中庸である、と。私は、この二つの態度の根本は恐らく、惰性だけですますことはできないであろう、実は卑怯なのだと考えています。強者に出会えば反抗する勇気もなく、『中庸』ということで誤魔化し、わずか

な慰めとする。それゆえ中国人がもしも権力をもち、他人が彼をどうしようもないと知り、あるいは『多数』が彼の護符となるときがあれば、多くは強暴残忍で、あたかも暴君であって、ことを決するのに決して『中庸』ではない。口を開けば『中庸』になってみると、それは勢力をすでに失い、とくに『中庸』でなければいけなくなったときです。(中略) これらの現象は実際、中国人を廃滅させうるものです、外敵があろうと、なかろうと。もしもこれらを救い正そうとすれば、さまざまな劣った点を先行して暴露し、その立派な仮面を引き裂くよりしかたがない。」(「通説(二)」、1925・3・29、『華蓋集』)

「中国国民性の墮落は、決して家のことを気にかけるためではありません。彼らは〈家〉のために考慮したことはないと思います。最大の病根は目のつけどころが近く、さらに〈卑怯〉と〈貪欲〉なことです。しかしこれは長い間に培ったもので、一時には取りのぞくのが難しいです。私はこれらの病根を攻撃する仕事について、もしもすべきことがあれば、現在も手放そうとは思いません。しかしたとえ効果があるとしても、恐らく大変遅いので、自分では見ることができません。」(「『魯迅景宋通信集』一〇」、1925・4・8、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6)

「中国人のさまざまな方面を直視する勇気のないことは、隠すのと騙すことを用いるもので、奇妙な逃げ道を作りだして、自らは正しい道だと思いこむ。この道にあることが、国民性の怯懦^{きようだ}、懶惰^{らんだ}と、そして狡猾であることを物語る。(中略) 事実において、いったん国が滅びると、何人かの殉難する忠臣がつけ加えられる。後には人々はいずれも旧いものを光復したいとは思わず、ただその数人の忠臣を賛美するだけである。」(「論睜了眼看」、1925・7・22、『墳』)

「さいわい誰も決定的に言う勇気はない、国民性は決して変わるはずがないものだ、と。」(「忽然想到 三」、1925・2・12、『華蓋集』)

「たとえ見いだすものが完全な暗黒にすぎないとしても、暗黒と闘うことができる。」(「忽然想到 十一」、1925・6・18、『華蓋集』)

2 民衆に対する弁護の道

魯迅は1925年頃において、旧社会の下層の弱小者、苦しむ人々に同情していたと思われる。しかし同時に他方で、目覚めぬ麻痺した民衆(愚民〈下層の人々を含めて〉)を憎悪していた。また、この民衆は封建的専制支配の結果、「沈黙」の「死相」の中に沈んでいた。

「我々の大多数の国民はじつに静かである。まことに喜怒哀楽が色に表れず、まして彼らのエネルギーや熱情を吐露することなど言うまでもない。」(「中山先生逝世后一周年」、1926・3・10、『集外集拾遺』)

「現在私たちが聞くことのできるのは、数人の聖人の徒の意見や道理で、それらは彼ら自身のためのものである。庶民については、むしろ黙々と育ち、やつれ黄色くなり、枯れ死にする、まるで大石の下の草のように。こうしてすでに四千年となる。」

(「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」、1925・5・26、前掲、82頁)

「すこし大きく国事に喩えてみよう。太平の盛世には、匪賊が存在しない。群盗がいたるところに発生するとき、旧史を見ると、必ず外戚、宦官、奸臣、小人が国政をつかさどっている。たとえ官話を大いにたぐってみても、その結果はやはり、『ああ、悲しいかな』の言葉である。この『ああ、悲しいかな』の前に、民衆（原文は小民——中井注）はたいてい相連れだつて盗賊となる。だから私は源増先生の話、『表面上、土匪や強盗にすぎないと見えるが、実際は農民革命軍である。』（《国民新報副刊》四三）ことを信ずる。それでは社会は進歩したのか。決してそうではない。（中略）農民は政権を奪取しようとしな。源増先生はまた、『四五人の熱心なものが皇帝を押し倒して、自ら皇帝中毒に浸っていくのにまかせておく』、と言う。」（「学界的三魂」、1926・1・24、前掲、207頁）

魯迅は、皇帝の支配を覆す原動力としての農民の力を認めている。農民の反抗・闘争の力量を認めている。

「年上のものの私に対する訓戒はこのように力があつた。そのため私も読書人の家の教えに従つた。息をひそめて頭を垂れ、いささかも軽挙妄動しない。両目は下の黄泉を見、天を見ることがあれば傲慢である。顔中に死相をよそおい、話したり笑つたりすれば無作法である。」（「忽然想到 五」、1925・4・14、『華蓋集』）

「ジェームス・ミルは、専制は人々を冷嘲に変える、と言つた。私たちの天下は太平であり、この冷嘲すらない。私は、暴君の専制は人々を冷嘲に変える、愚民の専制は人々を死相に変える、と思う。みんなは段々と死にいくが、かえつて自分は道を守るのに有効であると思ひこむ。（中略）

世の中でなお本当に生きていこうとする人がいるならば、先ず勇氣をもつて話し、笑い、泣き、怒り、打つのでなければならぬ。この呪うべき場所で呪うべき時代を撃退してしまわなければならない。」（「忽然想到 五」、1925・4・14、『華蓋集』）

このように、1925年頃当時、魯迅は大石の下に抑圧される民衆を弁護するとともに、農民のもつ反抗・闘争の力量を認めるようになっていく。また、農村の女性愛姑はまさしく、呪うべき場所と時代において、勇氣をもつて話し、泣き、怒る存在であつた。たとえ愛姑が澆婦であるとしても、魯迅が伝統的国民性の悪として批判したものは、愛姑のような粗野（それは弱者に向けられたものとは言えない）ではない。この意味で、魯迅の描く民衆の中で、愛姑ははじめて反抗し闘争する民衆の新しい類型であつたと思われる。

五 1925年頃の社会観と女師大事件

1 「灯火漫筆」と「春末閑談」の社会観

「私たち自身はとつくにきちんと配置している。貴賤があり、大小があり、上下がある。自分は人に虐げられるが、しかしまたほかの人を虐げることができる。自分は人に食われるが、しかしほかの人を食うこともできる。一段一段と掣肘^{せいちゆう}して、身動きすることができない。また身動きしたいとも思わなくなつていく。なぜならばもしもち

よつと動けば、利益はあるかもしれないが、しかし弊害もある。私たちはひとまず古人の優秀な方法と行為を見てみる。

『天に十日有り、人に十等有り、下の上に事える所以は、上の神に共する所以なり。故に王は公を臣とし、公は大夫を臣とし、大夫は士を臣とし、士は^{もつ}卑を臣とし、卑は輿を臣とし、輿は隸を臣とし、隸は僚を臣とし、僚は僕を臣とし、僕は台を臣とす。』（《左伝》昭公七年）

しかし『台』に臣がないのは、あまりにも苦しいのではないか。心配する必要はない。彼よりももっと卑しい妻、もっと弱い子どもがいる。」（「灯下漫筆」、1925・4・29、『墳』）

「このことから私たちの眼前で、なおさまざまな饗宴を自分の目で見ることができる。あぶり肉があり、フカヒレの宴席があり、日常の食があり、洋食がある。しかし茅葺きのもとに粗末な食事もあり、道ばたに残り物のつゆもあり、野には餓死者がある。あぶり肉を食う身代金をあがなえないほどの金持ちがおり、また飢えて死に瀕する一斤につき八文の子どもがいる（『現代評論』第21期を見よ）。いわゆる中国の文明とは実際、金持ちの食事のために人肉の饗宴を手配りするにすぎない。いわゆる中国とは、実際この人肉の饗宴を手配りする台所にすぎない。」（同上）

「この文明は、外国人を陶醉させたばかりではなく、またつとに中国のあらゆる人々を陶醉させずにはおかず、しかも笑いを浮かべさせるほどである。というのも古代から伝来し、今にいたるまで存続する多くの差別は、人々をそれぞれに分断し、ついに再びほかの人の苦しみを感ずることをできなくさせたからである。そして自分がそれぞれほかの人を奴隷として使い、ほかの人を食う希望をもっていることにより、自分にも奴隷として使われ食われる将来が同じようにあることを忘却する。そこで大小無数の人肉の饗宴は、文明が存在して以来現在にいたるまでならべられ、人々はこの会場で人を食い、食われ、凶暴な者の愚昧な歓呼によって、弱者の悲惨な叫び声を覆い隠した。女性や子どものことはさらに言うまでもない。

この人肉の饗宴は現在もならべてあり、多くの人にならべ続けたいと考えている。これらの人を食う者を一掃し、この宴席をすっかりかたづけ、この台所を打ち壊すことが、すなわち現在の青年の使命である。」（同上）

中国の伝統的旧社会は、上層から下層にいたるまで階層化されており、差別と分断によって、人は他人の苦痛を理解することができない。そのため、人は一段上層の者に苦しめられると同時に、一段下層の者を苦しめるという存在になる。

「私たちの造物主——もしも天に本当にこのような『主人』がいるものとすれば——を恨めしくなる。一つは『支配者』と『被支配者』を永遠にはっきりと区別しなかったことを恨む。二つには支配者に腰ほそ蜂のような針をもたせなかったことを恨む。三つには、思想中枢を蓄えている頭を切りとつても、なお動く——服役する——ことができるように被支配者を造らなかつたことを恨む。三つのうち一つを得ることができれば、金持ちの地位は永久に堅固であり、統制支配も永久に気力を節約でき、そのため天下は太平である。」（「春末閑談」、1925・4・22、『墳』）

魯迅は、上層の支配者金持ちと下層の被支配者による、大きな二つの階層に分けて、旧社会の関係をとらえようとするのが分かる。これを覆すことが、新しい青年の使命であると考えた。しかし封建的支配層をどのように覆すのか、覆した後の社会はどのようなものなのか。こうした問題について、魯迅は当時答えることができなかったと思われる。旧社会の封建的社会体制、倫理的支配体制に対する農村の弱者・女性の愛姑の反抗は、1925年当時の魯迅にとって肯定すべきものであったと思われる。たとえ愛姑の反抗の目標と手段が封建的な枠組みを脱却できていないものであるにせよ、またそれが敗北に終わったものにせよ。

2 女師大事件における女師大学生の反抗・闘争

旧社会の構造を精神的に支える奴隷根性の連鎖を断ち切り、学校当局と軍閥政府の抑圧に反抗し闘争したものは、北京女子師範大学の女子学生（知識人女性）である。

「私が中国女性の仕事ぶりを見たのは、去年に始まる。少数ではあるけれども、その熟練徹底した、幾度挫折してもくじけない気概を見て、かつてしばしば感嘆した。このたび弾雨の中で互いに助けあい、命を落とすことさえ顧みなかった事実〔1926年三・一八惨案のこと〕は、中国女性の勇敢毅然さが、陰謀密計にあい、数千年にわたって抑圧を受けてきたにもかかわらず、結局失われることがなかった明証とするにたるものである。もしもこのたびの死傷者について将来の意義を尋ね求めるならば、その意義はここにあるであろう。」（「記念劉和珍君」、1926・4・1、『華蓋集続編』）

小説「離婚」執筆の1925年11月6日前後において、女師大事件はほぼ女子師範大学学生の側の勝利の方向に向かいつつあったと思われる。8月、教育総長章士釗によって解散させられた女師大は、魯迅等の参加する校務維持会によって運営され、11月30日に復校する。当日、魯迅は女師大学生を率いて、宗帽胡同の仮校舎から石駙馬大街にある本来の女師大の校舎まで歩き、女師大回復の闘争の勝利を祝った。

封建的家庭の家長が子供の人格を認めず、ものとして取り扱うように、女師大事件において校長楊蔭榆は「学校はなお家庭のごとし」として、家長ように強権的に学生たちを取り扱おうとした。施家が愛姑を取り扱ったように。さらに細かな点を取りあげれば、教育総長や女師大校長の側にたって論陣を張り、権力と結託する『現代評論』派知識人がいる。小説「離婚」にも権力に諂う、「北京洋学堂」から帰ったばかりの知識人、下あごの尖った「少爺」（若旦那）がいる。また女師大校長楊蔭榆は料亭で一部の教員を集めて話し合い、その翌々日女師大自治会委員六名の除籍を決定した。施家が慰老爺を接待し、慰老爺は施家の意向を受けるように。こうした女師大事件と小説「離婚」における一連の類似は、女師大事件が小説「離婚」に反映した可能性を、私に想像させる。

六 愛姑の性格・思想と反抗・闘争について

1 萌芽として

愛姑の反抗・闘争の形態について言えば、中国清末における「反抗の原初形態」の萌芽と言える。たとえ愛姑の反抗の目標と手段が封建的な枠組みを脱却できていないもの

であるにしても、しかし封建的社会の支配体制、倫理的支配体制に対する民衆の反抗それ自体が肯定すべきものであった。淫婦にすぎないのではなく、淫婦の性格であるとしても、そこに人としての目覚めの思想的萌芽があり、原初形態としての反抗がある、と私は考える。それゆえ、そこに性格悲劇の側面がないとは言えないが、しかし基本的には歴史悲劇である。

魯迅は、封建的支配層・支配体制に対する愛姑の反抗・闘争と失敗に同情している。その失敗は、清末当時のまぎれもない社会的現実と思われたであろう。それゆえ私は、封建的支配構造に対する魯迅の注視・批判を読むことができても、しかし愛姑の闘争の軟弱さに対する魯迅の批判を読むことができない。

2 「カインの末裔」（有島武郎著）における反抗形態との比較

【「離婚」】

「『それじゃ私は命を投げだして、みんな破滅させてやります。』／『それは命をかけるようなことではない。』七大人はここでゆっくりと言った。『まだ年が若い。人はすこし穏やかでなければいけない。〈穏やかさが財を生む〉のだ。そうだろうが。わしは増やす額を十元と言うのだ。これはまったく〈天外の道理〉だ。もしそうでなければ、舅姑が〈出ていけ〉と言えば、出ていかなければならぬ。府は言うにおよばず、上海北京であれ、外国であれ、こういうふうなのだ。もし信じないのなら、彼は北京洋学堂から帰ってきたばかりだから、自分で聞いてみるがいい。』そこで下あごの尖った少爺〔若旦那〕のほうに顔を向けて、『そうだろうが』、と言った。／『仰せのとおりです。』下あごの尖った少爺〔若旦那〕は急いで身体をまっすぐに伸ばし、恭しく低い声で言った。／愛姑は自分が完全に孤立したと思った。父は話をしようとしなないし、兄弟は来ようとしなかった。慰老爺はもともと彼らを手助けしているのだし、七大人も頼りにならない。あごの尖った少爺さえもひしゃげたナンキンムシみたいに、声を抑えて〈ごますり〉をしている。しかし彼女は混乱する頭の中で、最後の奮闘をしようと思心したようである。／『どうして七大人様までが……。』彼女は眼いっぱい驚きと失望の光をたたえた。『そうです……。私は、自分たちが粗野な人間で、何も知らないと分かっています。父が人情や世故さえも分からず、老いぼれてしまったことを恨んでいます。〈老畜生〉〈小畜生〉〔舅と夫を指す〕のたくらみに乗せられてばかりです。あいつらは葬式の知らせでもするように、あわててこそこそもぐりこんで、取り入っているんだ……。』（中略）／彼女は身震いし、あわてて口をつぐんだ。というのも七大人が突然上のほうに両目を剥き、丸い顔を挙げると同時に、細長い鬚に囲まれた口から長く波打つような大きな声が発せられたからである。／『これ～～』、と七大人は言った。／彼女は心臓が一瞬止まったと思、それからどきどき打ちはじめた。大勢はすでに去り、局面が一変したのだ。あたかも水の中に足を滑らせたかのようなのであるが、しかし実際これは自分の誤りのせいだと知った。／たちどころに青の長衣黒のチョッキの男が入ってくると、手を垂れ腰をまっすぐにし、棍棒のようであった。／広間全体が〈物音一つせぬほどしんと静まりかえった〉。七大人は口をちょっと動かしたが、誰も何を言

ったのか聞きとれなかった。しかしその男は、すでに聞きとって、しかもその命令の力が彼の骨の髄にまで浸みたように、身を二三度引きつらせ、〈身の毛がよだつ〉かのようだった。そして答えた。／『はっ。』彼は数歩引き下がり、身を翻して出ていった。／愛姑は意外なできごとが到来するであろうことを知った。それは予想できないことで、防ぎようもないことだった。愛姑はこの時やっと七大人には実際威厳というものがあった、先ほどは自分の誤解であり、そのためあまりにも身勝手に、あまりにも粗野であったことが分かった。彼女は非常に後悔して、思わず自分でこう言った。／『私はもともと七大人の言いつけどおりにするつもりで……。』広間全体は〈物音一つせぬほどしんと静まりかえっていた〉。彼女の言葉は糸のようにか細かったけれども、慰老爺は霹靂を聞いたかのようにであった。彼は飛び上がった。『そのとおり。七大人はほんとに公平だ。愛姑もよく分かってくれた。』」（「離婚」）

【「カインの末裔」】

「やがて彼れは松川の屋敷に這入って行った。農場の事務所から想像してゐたのとは話にならない程ちがった宏大な邸宅だった。敷台を上る時に、彼はつまごを脱いでから、我れにもなく手拭を腰から抜いて足の裏を綺麗に押拭った。（中略）而して部屋の中は夏のやうに暑かった。／板よりも固い畳の上には所々に獣の皮が敷きつめられてゐて、障子に近い大きな白熊の毛皮の上に盛上がるやうな座布団の上に、はったんの襦袢を着こんだ場主が、大火鉢に手をかざして安座をかいてゐた。仁右衛門の姿を見るとぎろつと睨みつけた眼をそのまま床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし付けられて這入ることも得せずに透みしてゐると、場主の眼が又床の間からこっちに帰って来さうになった。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで畳の上になににちゃつにちゃつと音をさせながら場主の鼻先までのそのそ歩いて行って、出来るだけ小さく窮屈さうに坐りこんだ。／『何しに来た』／底力のある声にもう一度どやし付けられて、仁右衛門は思わず顔を挙げた。場主は真黒な大きな巻煙草のやうなものを口に銜へて青い煙をほがらかに吹いてゐた。そこからは氣息づまるやうな不快な匂が彼れの鼻の奥をつんつん刺激した。／『小作料の一文も納めないで、どの面下げて来臭った。来年からは魂を入れかへろ。而して辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿』／而して部屋をゆするやうな高笑が聞こえた。仁右衛門が自分でも分からない事を寝言のやうにいふのを、始めの間は聞き直したり、補ったりしてゐたが、やがて場主は堪忍袋を切らしたといふ風にかう怒鳴ったのだ。仁右衛門は高笑ひのくぎり毎に、たたかれるやうに頭をすくめてゐたが、辞儀もせずに夢中で立上がった。彼れの顔は部屋の暑さの為めと、のぼせ上がった為めに湯気を出さんばかり赤くなつてゐた。／仁右衛門はすっかり打摧かれて自分の小さな小屋に帰った。彼れには農場の空の上までも地主の頑丈さうな大きな手が広がってゐるやうに思へた。（中略）何んといふ暮しの違ひだ。何んといふ人間の違ひだ。親方が人間なら俺れは人間じゃない。俺れが人間なら親方は人間じゃない。彼れはさう思った。」（「カインの末裔」）

両者を比較してみると、次のような類似点がある。①封建的地主（あるいは農場主）の支配する農村を小説の舞台とすること、②主人公の人物像において強い生命力に溢れ

たふるまいと、粗暴な面（あるいは粗野な面）が描かれていること。③両者は反抗心に富み、支配層、伝統的習俗に対して反抗するが、しかし孤立する。（「聖者と山賊」〈青木保、『反抗の原初形態』、ホブズボーム、青木保訳、前掲〉に基づけば、愛姑と仁右衛門は報復者のタイプへと発展する可能性をもつ萌芽であろう。愛姑の矛先は嫁ぎ先に向かい、仁右衛門の矛先は同じ小作仲間に向かう。）④直接の話し合いの場において、封建的支配勢力（七大人、農場主）の威圧に屈服し、引き下がる。

愛姑の敗北について、例えば「『離婚』的叙事分析及其文化意蘊」（袁盛勇、張桂芬、前掲、2003・5）は権威崇拜心理による愛姑の奴隷への帰順を指摘する。しかしそれは、愛姑の一連の反抗経過を軽視する評価である（富裕な自作農の父親と兄弟の支援のもとでの反抗であったにしても）、と私には思われる。

魯迅は、愛姑の思想面から言えば、人としての権利に目覚める萌芽をもつものであることに注目し、反抗の形態から言えば、反抗の原初形態の萌芽であることに注視したと考える。たとえ愛姑の性格に粗野な澆婦の面があるとしても、そしてその反抗の原初形態の萌芽が旧社会の中で敗北せざるをえない運命であるとしても、またそれが目標と手段を誤って選択しているとしても、魯迅は、人としての権利に目覚める思想の萌芽を肯定し、封建的支配層に対する反抗の原初形態の萌芽としての価値を肯定して、この小説に描いた、と私は考える。

このように見てくると、私は愛姑の性格・思想および反抗・闘争について、須旅の見解（1941）に基本的に賛成していることになる。小論はその根拠を、1925年当時の魯迅の変化・発展する民衆観、そして当時の社会観、女師大事件の経験等に求めて、論じたものである。

【参考文献】

『魯迅全集』全16巻、人民文学出版社、1981

『魯迅全集』全18巻、人民文学出版社、2005・11

『魯迅訳文集』全10巻、人民文学出版社、1959・1

『魯迅全集』全20巻、学習研究社、1984—1986

『魯迅——その文学と革命』、丸山昇、平凡社、1965・7・10

『魯迅と革命文学』、丸山昇、紀伊國屋書店、1972・1・31

『魯迅 〈人〉〈鬼〉の葛藤』、丸尾常喜、岩波書店、1993・12・22

『魯迅〈野草〉の研究』、丸尾常喜、汲古書院、1997・3・28

『魯迅 日本という異文化のなかで』、北岡正子、関西大学出版部、2001・3・31

『魯迅・文学・歴史』、丸山昇、汲古書院、2004・10・19

「離婚」について

〔中国語文献〕

①「辛亥の女兒——1925年的『離婚』」、須旅、『魯迅研究叢刊』第1輯、魯迅文化

出版社、1941・1、『魯迅研究學術論著資料匯編1913—1983』第3卷、中国文聯出版公司、1987・3

②「『離婚』」、許傑、『魯迅小説講話』、泥土社、1951、『魯迅卷 第六編』、中国現代文学社

③「中国反封建思想革命的鏡子——論『吶喊』『彷徨』的思想意義」、王富仁、『中国現代文学研究叢刊』1983年第1輯、1983・3

④「『離婚』与『小公務員的死』的比較分析」、林興宅、『魯迅研究』（双月刊）1983年第3期、中国科学出版社、1983・6・15

⑤「説『離婚』」、吳組緝、『中国現代文学研究叢刊』1985年第1期、1985・1

⑥「刻劃深切、技巧円熟之作——論《肥皂》《離婚》」、范伯群、曾華鵬、『魯迅小説新論』、人民文学出版社、1986・10

⑦「論『離婚』——兼談傳統与“拿来”」、孫昌熙、韓日新、『文史哲』1987年第6期、山東人民出版社

⑧「論魯迅小説創作的無意識趨向」、藍棣之、『魯迅研究動態』1987年第8期、北京魯迅博物館、

⑨「為愛姑一辯」、葛中義、『魯迅研究動態』1988年第2期、北京魯迅博物館、1988・2・20

⑩「論『離婚』在魯迅小説創作中的意義」、林志浩、『魯迅研究』（下）、中国人民大学出版社、1988・6

⑪「第7章 客觀的描述的主觀浸透」、汪暉、『反抗絕望——魯迅的精神結構与《吶喊》《彷徨》研究』、上海人民出版社、1991・8

⑫「重讀魯迅『離婚』」、秦林芳、『中国現代文学研究叢刊』1994年第4期、作家出版社、1994・10

⑬「第14章 『離婚』芸術技巧的得失」、林非、『中国現代小説史上的魯迅』、陝西人民教育出版社、1996・9

⑭「『離婚』的叙事分析及其文化意蘊」、袁盛勇、張桂芬、『魯迅研究月刊』2003年第5期、2003・5・30

〔日本語文献〕

①『反抗の原初形態』、ホブズボーム著、青木保編訳、中央公論社、1971・1・25

②「『カインの末裔』論」、上杉省和、『有島武郎——人とその小説世界——』、明治書院、1985・4・25

③「魯迅作品『離婚』論」、永井英美、『日本中国学会報』第57集、2005・10・8

④「『カインの末裔』と『阿Q正伝』」（康鴻音、『近代の闇を拓いた日中文学——有島武郎と魯迅を視座として——』、日本僑報社、2005・12・28）

⑤「女の描き方——『離婚』を中心として」、代田智明、『魯迅を読み解く』、東京大学出版会、2006・10・10